



Title	『全体新論訳解』二種の研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	許, 春艷
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12071号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61568
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Xu_Chunyan_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（文学） 氏名 許 春艶

学位論文題名

『全体新論訳解』二種の研究

近年、日中近代語彙交渉に関する研究、特に学術用語の交渉に関する研究には、漢訳洋書を研究資料とすることが多くなり、両国の研究者によって漢訳洋書の内容・資料的価値に関する研究が蓄積されてきた。しかし、漢訳洋書の日本受容という視点からの研究は今後に期待される部分であり、漢訳洋書の和訳書に関する研究はいまだ十分に行われていない。本論文は漢訳洋書の『全体新論』およびその和訳書『全体新論訳解』を研究対象にして、和訳書と近代日本語の関連性そして和訳書の資料的価値を見出そうとしたものである。

本論文が対象とする漢訳洋書の『全体新論』は、1851年（咸豊元年）、イギリスの宣教医ホブソンにより漢文で著され、中国広州恵愛医館から刊行された。これは近代中国においてはじめての西洋医学を紹介する生理学入門書であった。『全体新論』は、1854年（嘉永7年）頃に日本に伝わり、1857年（安政4年）に越智氏によって翻刻された。その和訳書は、1873-4年（明治6-7年）に高木熊三郎『全体新論訳解』が大阪で、1874年（明治7年）に石黒厚『全体新論訳解』が名古屋で出版された（以下、それぞれ高木『訳解』と石黒『訳解』と略す）。

本論文は「序論」と「結論」を入れて七章からなる。第二章と第三章は『全体新論』と『訳解』二種との関係を書誌学的・文献学的な視点から検討した。第四章と第五章は二種の『訳解』における近代日本語の表記と漢字音を中心に国語学的研究を展開した。第六章は漢訳洋書の日本受容を考察した。以下、各章の内容を詳しく述べる。

第一章では導入として『全体新論』と二種の『訳解』を研究する背景と意義を検討した。

第二章では『全体新論』と『全体新論訳解』の書誌と二種の『訳解』の言語資料としての価値を概観した。先行研究と書誌調査を通して、『全体新論』と二種の『訳解』の著者、内容構成と相互関係を明らかにした。そして、『全体新論』は日本で啓蒙書としても教科書としても使われ、大きな影響を及ぼしたものであることを明らかにした。石黒『訳解』は原漢文をほぼ忠実に訓読した漢文訓読文であるのに対して、高木『訳解』は原漢文に見えない表現を加えた翻訳文である。二種の『訳解』には豊富な振り仮名があるため、これらの振り仮名の比較を通して日本語表記、字音と語彙を研究する方法を示唆した。

第三章は『全体新論』と二種の『訳解』の現存本に関する調査報告である。調査結果は、次の四点にまとめることができる。①字書類の利用形跡。現存本の現地調査により当時の使用者は漢文を読解する際に『字彙』『康熙字典』『増続大広益会玉篇大全』など

の字書を用いて難字を解釈したこと、医学用語の書き入れから中国の漢方書籍・西洋人の著述を参照したことを確認した。②高木『訳解』の利用形跡。高木『訳解』を参照して『全体新論』に書き入れた例を複数発見した（多和文庫本・早稲田大学本・慶応義塾大学富士川文庫本）。これは『全体新論』の読解に際して使用者が和訳書を参照したことと、高木『訳解』が広く読まれたことを示すものである。③漢字解釈の書き入れから見た『訳解』二種の相違。四種以上の現存本に見られる漢字解釈の書き入れを73字抽出して二種の『訳解』にどのように和訳されたかを検討したところ、二種の『訳解』は漢字に対する解釈の方法に相違があることが観察された。石黒『訳解』は左右両側振り仮名と左側振り仮名、高木『訳解』は右側振り仮名に訓読みが多いことなどを明らかにした。④石黒『訳解』の版種。石黒『訳解』の諸本をすべて調査して再版本（北大本等）の存在を明らかにした。

第四章では二種の『訳解』の振り仮名をデータベース化する手順とその集計方法を説明した上で、二種の『訳解』における訳述方法の差異による振り仮名の特徴差を中心に分析した。石黒『訳解』は漢文訓読文である。一方で、高木『訳解』は漢文訓読にとどまらず、語レベルの翻訳もしており、漢文訓読調の文体となる。この異同により、両書の振り仮名の付け方に相違が生じることを明らかにした。まず、音読みと訓読みの量が異なる。石黒『訳解』は音読みが多く付され、高木『訳解』は訓読みが多く付されている。品詞構成比率も異なる。とりわけ訓読みでは、石黒『訳解』が名詞、動詞、副詞の順に多いのに対して、高木『訳解』では動詞、名詞、副詞の順となるなど、品詞構成比率の差が顕著である。さらに、左右両側振り仮名が付されるのは二種の『訳解』の共通点である。石黒『訳解』には全文にわたり数が多いが、高木『訳解』は第一節と第二節に集中し、第三節以降、そのほとんどが右側振り仮名に統一されている。

第五章では二種の『訳解』における漢字音の揺れを中心に考察した。両書ともに漢音と呉音の揺れが一番多く、同一漢語に対する異なる漢字音の用例から見ると、高木『訳解』の方が石黒『訳解』より揺れる語が多いことが確認できた。呉音と漢音の揺れ以外に漢音と漢音、漢語と慣用語などの揺れも見られる。これらの漢字音の揺れは、①古い音の位相の区別がなくなって併用するもの、②古い音に新しい別の音を与え併用するもの、③新語に複数の音を併用するものの三種の型に分けられる。

第六章では『全体新論』と二種の『訳解』を中心に漢訳洋書の受容について論じた。医学用語の受容過程に反映されている、漢訳洋書を通じた日本への西洋文化受容の全体像を概観した上で、医学用語の受容について「～骨」の形態を持つ医学用語を検討して「坐骨」等の用語は明治初期から日本に受け入れられたことを明らかにした。また、『全体新論』の直読・施訓、『全体新論』和刻本での訓読・書き込み（引用、抄訳）、和訳本による訓読文作成、という『全体新論』の受容過程を示した。

第七章では議論の総括と今後の展望を述べた。

本論文は漢訳洋書『全体新論』の和訳書『全体新論訳解』の二種を取り上げて、振り仮名の相違と漢字音の揺れを実証的に明らかにした。研究方法としては、漢訳洋書と和訳書の現存本調査と書き込みによる使用形跡の分析、二種の『訳解』のデータベース化による振り仮名（和語・字音）の分析の二つに特徴がある。従来の研究では和訳書に対する本格的な分析はなされておらず、その資料的価値が重視されていなかったが、本論

文はその資料的価値を見出して、近代日本語の有益な資料としての位置づけを行い、和訳書が近代日本語の研究資料として重要な価値を持つことを主張したものである。